

# 山田文昭についての覚書

——真宗史学史考（二）——

安 藤 弥

はじめに

本稿は、「真宗史研究の先駆者」<sup>(1)</sup>に位置付けられる山田文昭（一八七七—一九三三）<sup>(2)</sup>の生涯とその学問・研究スタイルについての覚書である。

山田文昭については、かつて同朋大学の学祖住田智見（一八六八—一九三八）により、次のように評されている。<sup>(3)</sup>

思ふに真宗史は山田君によつて大成せられたとはいひ得ないであらう。

然しながら真宗史の揺るぎなき基礎は君によつて定められ、真宗史学は正に君によつて開拓せられた。

「真宗史学の開拓者」<sup>(4)</sup>、「近代真宗史学の嚆矢」<sup>(5)</sup>、あるいは「実証的な真宗史学を樹立した」<sup>(6)</sup>とも評される山田文昭

は明治・大正・昭和（初期）の時代を生き、大谷大学、真宗専門学校（後の同朋大学）の教授職を歴任するなかで、親鸞研究をはじめ数多くの真宗史上の問題を解明すべく研究に取り組んだ。その精力的な史料収集と、それに基づく綿密な考証によって導き出された研究成果のいくつかは今もなお生きている。もちろん真宗史研究の豊かな潮流は、山田個人に注目するだけで捉えきれるものではないが、先駆者としての評価はゆるがないであろう。

ところで、現在では個別宗派史観の問題性（限界性）がとくに指摘されており、「真宗史学（研究）」それ自体の枠組みや存立意義そのものを問わねばならない段階にある。とすれば、そのために必要な作業の一つが「真宗史学史」の検討である。明治以降、近代的な学問方法が成立していくなかで、従来の宗門内の故実研究が根本的な見直しを迫られたことは、例えば親鸞架空論争の経緯などをみれば、推測に難くはないが、そのような状況のなかで、宗門の内外にかかわらず、多くの学者・研究者が「真宗史」に注目するに至ったことは確かである。まず注目されたのは親鸞伝研究であったが、次第に親鸞のみならず、その教団にまで本格的検討が加えられていく。ここに真宗史研究の成立が見出されるとすれば、やはり、山田文昭という存在が鍵となる。これまで、親鸞伝研究や教団史研究の研究史整理においては必ず言及されると言ってよい山田文昭であるが、その生涯や研究活動そのものが本格的に検討されたことはない。しかし、「真宗史学（研究）」それ自体が百年以上の歴史をたどった現在においては、その草創期に生きた個人を歴史的な検討対象にも据えていくべき段階である。以上の問題関心を前提として、本稿は山田文昭を一つの素材として検討しつつ、「真宗史学史」について考えてみようとする一つの試みである。

## 一、山田文昭の生涯

まず、山田文昭の生涯について、その遺稿集第二巻『真宗史の研究』（破塵閣書房、一九三四年）の巻末に収録されている「超世院文昭先生略年譜」の内容（【表1】参照）や、真宗大谷派宗門の機関誌である『宗報』『真宗』の関係記事の内容に従って確認していきたい。

山田文昭は明治十年（一八七七）十二月九日に誕生した。幼名は昭然。生まれ育った正福寺は、「三河三か寺」の一つとして知られる佐々木上宮寺の門前に位置する。父の山田文成もまた三河の碩学として知られ、現在、正福寺本堂裏にある顕彰碑は文成・文昭兩人の事蹟をたたえたものである。幼少時の詳細は明らかでないが、三河真宗の中心地の一つであった佐々木には上宮寺を中心とした学問環境の形成が推測され、そのなかで幼き昭然は成長したことになる。

得度、改名を経て山田文昭は、三河教校、三河中学寮から真宗東京中学へと進み、明治三十四年（一九〇一）七月には東京巢鴨への移転間近であった京都の真宗大学を卒業している。その後、明治三十九年（一九〇六）に真宗大学研究院を卒業しているから、山田は研究院生時代に清沢満之らによる真宗大学の東京移転開校という事態に直面したことになる。なお、この間に父文成の逝去により正福寺住職となっている。

その後、真宗大学図書係となり、擬講の学階も得た山田文昭は、明治四十三年（一九一〇）には真宗大学図書館

【表1】山田文昭略年譜（＊「超世院文昭先生略年譜」等より摘要）

和 暦	西暦	月 日	内 容	年齢
明治10年	1877	12月 9日	愛知県碧海郡矢作町大字上佐々木字梅ノ木正福寺に、山田文成の二男として生まれる。幼名昭然。	1才
明治22年	1889	8月17日	得度。	13才
明治26年	1893	3月29日	幼名昭然を文昭に改める。	17才
		7月25日	三河教校（岡崎）を卒業する。	
明治28年	1895	7月25日	三河中学寮を卒業する。	19才
明治29年	1896	3月 3日	正福寺副住職になる。	20才
明治30年	1897	4月 日	山田月樵とともに三為会の委員（後に幹事）になる。	
		8月 7日	真宗東京中学を卒業する。	21才
明治32年	1899	6月11日	教師補任。	23才
明治33年	1900	6月 9日	三為会幹事を委嘱される。	
明治34年	1901	7月 1日	真宗大学（京都）を卒業する。学階学師補の称号を授与される。	25才
明治37年	1904	7月17日	父文成没（香雪院）。	28才
		8月25日	学階学師の称号を授与される。	
		9月28日	正福寺住職になる。	
明治39年	1906	6月27日	真宗大学研究院（東京）を卒業する。	30才
明治40年	1907	3月 1日	真宗大学図書係になる。学階擬講の称号を授与される。	31才
明治43年	1910	3月 3日	『本願寺誌要』編輯委員に就任する。	34才
		9月 1日	真宗大学図書館長に就任する。	
明治44年	1911	9月 6日	真宗大学図書館長を辞任する。真宗大学残務委員に就任する。	35才
大正元年	1912	9月 1日	真宗大谷大学図書館長（京都）に就任する。	36才
		9月 8日	真宗大谷大学教授を兼任する。	
大正3年	1914	10月26日	第4回布教講習会指導として「秘事法門の梗概」と題する講義を行なう。	38才
大正4年	1915	4月13日	法宝物鑑査加歳を命じられる。	39才
大正5年	1916	正月28日	本山御殿講において「我國仏教史上に於ける親賢聖人」と題する講義を行なう（全7回）。	40才
大正7年	1918	8月 1日	学階嗣講の称号を授与される。	42才
		9月26日	教学商議会第二部委員を命じられる。	
		10月 8日	宗意諮問会委員を命じられる。	
大正9年	1920	9月 1日	真宗大谷大学図書館長を辞任する。	44才
大正10年	1921	2月 1日	侍董寮出仕を命じられる。	45才
大正11年	1922	7月 1日	本山侍董寮内聖典編纂主任を命じられる。	46才
		12月11日	正福寺住職を退く。	
大正13年	1924	5月 8日	本山御殿講において「恵信尼文書」について講義する。	48才
		9月 1日	真宗専門学校（同朋大学の前身）教授に就任する。	
大正14年	1925	3月 7日	学階銓衡第一部委員・第二部委員を命じられる。	49才
		4月 1日	宗意調査委員を命じられる。	
昭和2年	1927	7月 日	真宗専門学校教授を辞任する（疑問あり）。	51才
		8月 1日	大谷大学学部教授兼専門部教授になる（親授一級）。仏教史講座を担当する。	
		11月 1日	宗史編修所長を嘱託される。	
昭和3年	1928	3月27日	学階銓衡第一部委員・第二部委員を命じられる。	52才
		4月 1日	京都帝国大学文学部において講義「日本浄土教発達史」を担当する。	
昭和5年	1930	7月12日	大谷大学学部教授・同専門部教授・宗史編修所長等の職務を辞任する。	54才
		9月 1日	再び大谷大学学部教授に就任する（列特授）。	
昭和6年	1931	6月 3日	大谷大学学部教授を辞任する。	55才
		9月11日	再び真宗専門学校教授に就任する。仏教学を担当する。	
		12月 1日	宗史編修所顧問を嘱託される。	
昭和8年	1933	4月17日	学階講師の称号を授与される。	57才
		4月18日	午前11時、愛知県幡豆郡幡豆村東幡豆福泉寺において急逝する。	
		4月22日	正福寺において葬儀が執行される（超世院）。	

長に就任する。当時の図書館長は学長・学生監の次に記される重職である（大正四年教職員名簿）。しかしその翌年、真宗大学の廃校が議論され、実行されることになる。これに従い山田は図書館長を辞任、月見覺了とともに真宗大学残務委員となっている。残務委員は月見と山田の兩名のみであったから、山田は書籍の管理・移転などにとどまらず、さまざまな重責を担ったであろう。

真宗大学が東京にあったおよそ十一年間、山田文昭は研究院生から図書係、そして図書館長へと立場を変えていくが、ここで学問・研究活動の基本的な方法を学び、確立したものと思われる。明治四十四年（一九一）の親鸞六百五十回忌に際し東本願寺より刊行された『本願寺誌要』が実質、山田文昭により執筆、編纂されたとみられることからしても、すでに宗門内の歴史学者として認められていたことは確かであろう。しかし、山田が誰に師事したのかということは判然としない。仏教史学の創始者として知られ、先に東京に進出していた村上專精（一八五一—一九二九）<sup>(8)</sup>らとの交流が繁く見られてもよさそうなのであるが、不詳である。また東京にありながら、東京の学界動向における山田の活動も知られない。すなわち、山田の学問・研究方法が、誰を師とするものなのか、あるいは西欧近代歴史学の影響があるのかどうかという重要な問題については、今のところ手がかりがほとんど見出せないのである。

さて、東京巢鴨の真宗大学の廃校については、京都高倉大学寮との確執の末に、学制統一という名目のもと、両者の併合というかたちで、京都において再スタートを切ることになったのであるが、明治四十四年九月二十三日の真宗大学退去の後、十月十三日には新大学の開校式が行なわれている。もっともこれは旧高倉大学寮の校舎をその

まま仮校舎としたもので、教職員の顔ぶれも旧高倉大学寮関係者が中心であった。そのなかで図書館長心得には大屋徳城が任じられている。山田の動向を探れば、明治四十五年（一九一二）五月三十日付で布教使として岡崎駐在布教を命じられており、野に下っていたことが知られる。

しかし、同年（一九一二）大正元年）九月一日付で、山田文昭は真宗大谷大学図書館長を任じられ、八日付で兼教授に任じられた（大屋徳城は図書館長心得を解任）。これは同年十月十三日に真宗大谷大学が新たな校舎において正式なスタートを切ることになったからである。このとき、住田智見ら一部の真宗大学関係者も教授職に復帰し、また図書係兼書記には日下無倫が命じられている。

以来、山田は大正九年（一九二〇）まで真宗大谷大学の図書館長兼教授を勤めるが、この間にもっとも精力的に史料収集活動を行なっている。図書館蔵本の充実を図ったのであろう。この問題は次節であらためてとりあげることにしたいが、同時期の山田個人の動向としては大正五年（一九一六）に「御殿講」を講じ、同七年には学階嗣講となり、同十年には侍董寮出仕、そこで聖典編纂主任を務めている。その翌年からは精力的に各地へ講習・説教に出かけていることが知られる。研究者としてのみならず、宗門学事において重責を担うようになり、また布教使、説教者としての行動も増えていくのである。真宗大谷大学においては、大正四年に仏教史、五年に真宗史、六年には再び仏教史を担当しているが、これは同講義の名称変更と推測される。この表現の揺れは、当該期の宗門学事ならびに真宗大谷大学内で起こっていた深刻な路線対立と関係があらう。この路線対立は、いわゆる真宗中心主義と仏教中心主義の対抗とよく説明されるが、具体的には真宗大谷大学から大谷大学への名称変更と、学校条例内の「宗

門の須要に応ずる」から「仏教及び人文に須要なる」への文言變更に、その問題点がうかがえる。

そして、この流れに反対し、あくまで真宗中心主義の立場を主張した住田智見が、大正九年九月一日付で、真宗大谷大学教授を辞任する事態となる。これが、後の真宗専門学校（同朋大学の前身）設立の発端でもあったが、同日付で山田文昭もまた、図書館長兼教授を辞任した。山田は盟友住田と行動をとめたのである。ちなみに山田の後、十月十五日付で山辺習学が新たに図書館長に就任している。講義は新体制に伴い細分化されたが、真宗史・日本仏教史分野は上杉文秀・日下無倫、そして橋川正が担ったことが知られる。

住田とともに野に下った山田ではあったが、前述のように侍董寮に出仕し、聖典編纂主任を務めるなど、新たな立場に就いていく。その山田の人生における次の転機は、大正十三年（一九二四）九月一日、名古屋市下茶屋町の真宗専門学校（後の同朋大学）に嘱託教授として就任したことである。<sup>(9)</sup>これには盟友住田智見の招きがあったものと見て間違いないだろう。真宗専門学校は大正十年（一九二一）に創立されたところであった。大正十五年（一九二六）時の山田は真宗専門学校において、科外講義「祖伝及び其教団」を担当している。

その後、昭和二年（一九二七）には再び、京都の大谷大学の学部教授兼専門部教授に着任し、仏教史講座を担当しているが、この大谷大学復帰については、同年、宗史編集所長を嘱託されていることが重要な点である。この宗史編修所は、従来、侍董寮の事業であった宗典宗史の編纂事業を侍董寮から切り離し、これを行なうために新たに大谷大学内に設置したものであった。その編修所長として、山田に就任が要請されたのである。宗門の宗典・宗史の編纂事業において、山田の存在がなくてはならないものになっていたと言えよう。翌年には京都帝国大学にも出

講し、文学部において「日本浄土教発達史」を講義している。なお、この間も、真宗専門学校において講義を担当していることが知られるが（昭和二・三年・科外講義「祖伝及び其教団」、昭和四年に至って、講義から外れ、同年真宗専門学校では山上正尊が「宗祖史」を担当している）。

京都において、大谷大学における仏教史講座、宗史編修所長の業務、京都帝国大学への出講、侍董寮への出仕、教学商議會への出席、さらには新たに構想された真宗大学院においても助教授に任じられるなど、多忙をきわめた山田文昭は、次第に身体を壊していったようである。そしてついに昭和五年七月、大谷大学において職務をすべて辞任することになる。九月に学部教授にのみ再任されるが、翌年六月にはそれも再度辞任している。この間、侍董寮出仕も病欠が多くなっており、体調不良が最大の理由であろう。ただし、同時期の大谷大学における状況として、昭和五年四月に曾我量深が異安心を理由に教授辞任に追い込まれるといった大波乱の事態が指摘される<sup>10</sup>。大正・昭和初期におけるアカデミズムの高揚が指摘される一方で、宗門学事は相当に揺れ動いており、大谷大学や真宗専門学校などを場として惹起した、学問の方向性をめぐる緊張関係に、山田文昭も無関係でいらなかった可能性は高い。宗史編修所が大谷大学から東本願寺教育部内に移されたのも、一連の混乱状況に関係しているのではなからうか。山田は編修所顧問という役職に就くが、体調不良という状態からしても、果たして実働があったかどうか、定かではない。

おそらくさまざまな要因が重なった結果、山田は故郷に帰り、昭和六年九月に再び名古屋の真宗専門学校に仏教学担任教授として復職し、論註の講読と、真宗史の講義を担当している。しかし、翌年六月三十日に休職。病状が



悪化したのであろう。このころ、三河各地における説教活動は垣間見えるが、病氣療養しながらの活動であったと見られる。ちなみに昭和八年三月十日付で蓮如御影の吉崎下向の随行を、河野法雲・上杉文秀・住田智見の三名とともに命じられているが、果たして赴いたのであろうか。

昭和八年（一九三三）四月十八日、山田文昭は愛知県幡豆郡幡豆村の福泉寺において急逝する。享年五十七歳。その前日、学階講師の称号を授与されている。

以上のような山田文昭の生涯のなかで、①東京巢鴨の真宗大学との関わり、②真宗大谷大学図書館長時代の活動、③草創期の真宗専門学校との関わりなどが画期として注目されようが、特に注目されるのは②に始まる膨大な史料収集活動である。これを次節でとりあげることにはしたい。

## 二、山田文昭の学問・研究スタイル

ここでは、山田文昭の学問・研究スタイルについて、その著作や蔵書などから得られる手がかりをもとに考えてみたい。

まず、現在知られている山田文昭の著作について確認しておきたい（【表2】参照）。急逝により、ついに研究成果の集大成的な著作活動を行なう機会が山田になかったことが、多くの学友により惜しまれているが、発表論文数は相当に多く（遺稿集第二巻末に論文目録が収録されている）、著作にしても少なからず注目すべきものが世に

【表2】山田文昭の著作（＊編著・遺稿集・没後出版も含む）

書名	出版社名	年次	備考
ちご桜	光融館	1900	* 文学的作品で処女出版。遺稿集未収録。
仏教の女子	森江書店	1901	* 遺稿集未収録。
真宗信者の規範	森江書店	1911	* 後に再刊（1936年）。
本願寺誌要	本山文書科	1911	* 実質的編著。親鸞六百五十回忌記念出版。
三本對照 親鸞聖人門弟交名牒	護法館出版部	1912	* 遺稿集第一巻再録。『真宗史料集成』第一巻所収。
秘事法門集	東京真宗典籍刊行会	1917	* 『続真宗大系』第五巻所収（編著）。
法水分流記	真宗大谷大学・仏教史学会	1918	* 編著・解説。
真宗の教団	本山寺務所	1919	* もとは「真宗」所載のものを単行出版。
黒衣の聖者	仏教学会	1920	* 布教叢書第十三編として単行出版。後に再刊（信道会館、1933年。法蔵館、1973年）。遺稿集第四巻再録。
統選釈文義要鈔	京都中外出版	1923	
真宗略史	京都中外出版	1923	* 『新撰真宗聖典』附録。
真宗史	仏教学会	1924	* 後に再刊（法蔵館、1930年）。
式嘆徳文講義	仏教学会	1924	
親鸞聖人	法文館	1933	
真宗史稿	破塵閣書房	1934	* 山田文昭遺稿集第一巻。後に再刊（法蔵館、1968年）。
真宗史の研究	破塵閣書房	1934	* 山田文昭遺稿集第二巻。後に再刊（法蔵館、1979年）。
日本佛教史之研究	破塵閣書房	1934	* 山田文昭遺稿集第三巻。後に再刊（法蔵館、1979年）。
道遥遊語	破塵閣書房	1934	* 山田文昭遺稿集第四巻。法語・日記・詩藻等を集録。
恵信尼文書に就て	破塵閣書房	1935	* 山田文昭遺稿集第五巻。東本願寺の「御殿講」において行なった演述の草稿を山田文郁の依頼を受けた桜部文鏡により単冊化。
親鸞とその教団	法蔵館	1948	* 遺稿集第一巻収録を単冊刊行。
山田文昭先生法語録	法蔵館	1955	* 二十三回忌記念に聖教会が編纂。

出されている。例えば、大正十三年（一九二四）に刊行された『真宗史』は東本願寺仏教学会における講義録であったが、諸方の懇望により、公刊に至ったという。「当流の博学歴史家」による『真宗史』は大谷派夏季学校の参考書として推奨されている。

山田の研究活動としては、何と言っても、精力的な史料収集が注目される。「夢白廬文庫」と名付けられた山田文昭の蔵書は、その没後の昭和十二年（一九三七）に真宗専門学校に寄贈されたものだけでも二百点を超えるが、さらに大谷大学や有縁の学友・寺院にも分けおかれており、総数や現存状況の把握が困難である。そのなかには法隆寺一切経を含む古写経・古版経をはじめとしてさまざまな貴重本が多数含まれており、それらを収集し得た山田の眼識の深さがうかがわれる。なお、山田の蔵書には蔵書印が押されている。山田の蔵書印について、管

見に及んだものについては、本稿末尾に参考として掲げた。

真宗史に関わる基礎的史料の収集・影写・翻刻の成果もまた貴重である。遺稿集第二巻に収められ「祖蹟採訪史料」と名付けられた調査史料メモや「常陸在住宗祖門侶遺蹟考」「光明本尊調査」「三本対照親鸞聖人門侶交名帳」等は、現在の研究水準から見ても驚くべき内容量である。これらが以後の真宗史料研究の礎となったことは、例えば現在の真宗史料集として著名な『真宗史料集成』（特に第一巻）において、その成果が随所に盛り込まれていることから明らかであろう。山田が関わった調査は、自らの研究に資するというより、宗門の歴史を明らかにするための基礎的調査と宗宝とすべき法宝物の選定という目的を強く持つものであった。例えば、大正九年（一九二〇）の聖徳太子一千三百年忌奉讃法要に先立って山田は関東を巡回し、初期真宗の聖徳太子関係法宝物の点検を行っているが、この成果に基づき、法要当日には聖徳太子法宝物拝覧会が行なわれたのである。なお、大正七年（一九一八）の祖蹟採訪史料調査に関する報告では山田とともに阿部現亮、橋川正、藤原猶雪、大淵真了の名が挙げられている。調査は単独行ではなく、複数でチームを組み、精力的に向向していたようである。

真宗大谷大学図書館の活動においても、山田文昭を中心としたチーム編成が知られる。前述のように真宗大学時代に図書館長になって以来、図書館蔵書の充実を目指して、山田は実に精力的な活動を行なっている。『真本書写目録』<sup>12</sup>によれば、二十五部の聖教を模写（影写）し、十八部の聖教を校合したとされ、その活動に携わった人びととして荒木大忍、上場顕證、小林什尊、長野道平、吉澤祐賢らをはじめ十人の名が挙げられている。大谷大学に現在所蔵されている書籍の成立過程が知られ、興味深い。また、大正四年時、山田館長のもとには、司書として日下無

倫と藤原猶雪がいた。両名とも後に真宗史に名をはせた研究者である。スタッフの充実ぶりもうかがえよう。

そのほか、各地の真宗寺院に所蔵される貴重な典籍史料の影写・書写作業については、特に明治四十四年（一九一〇）から大正八年（一九一九）頃にかけての活動が精力的である。大谷大学図書館として調査を行ない、影写をしたという奥書から、さらにそれを後年、山田が重ねて影写したという奥書も多く見える。一例として『山科御坊事并其時代事』の書写奥書を挙げておけば、「（前略）又云／本書ハ越前永臨寺所蔵ノ書ヨリ影写セシメタルモノ也／大正六年五月 真宗大谷大学図書館」「大正八年四月二日雄山南窓の下ニ於テ図書館本より／影写し了る 原本誤字頗る多し他日若し善本を得者校訂すべきもの也 文昭識」とある。影写活動の場所については、調査先で原史料を写すのはもちろんのこと、借り出して京都や東京の旅寓で写すといった記述が見られる。さらに前掲文中の「雄山南窓の下」、あるいは「洛北閑雲居」において写したという記述が諸書の奥書に散見され、これは当時の山田の京都における居所を示しているよう。

以上のような活動状況からして、山田文昭の学問・研究スタイルを支えたのは地道な史料収集と影写活動にあることは確かめられるが、さらに、山田文昭を取り巻く人間関係から、その学問傾向を見てみたい。

山田文昭遺稿集においてその序を記したのは住田智見・上杉文秀・西田直二郎の三人である。住田智見と山田文昭の親交は明治三十六年、東京の真宗大学においてはじまるといふ。京都では同居生活を送るなどかなり親密な交流があったようで、この縁が真宗専門学校まで続いたことは前述の通りである。住田は遺稿集第一巻の序において、山田の「日頃の蘊蓄を傾倒した大真宗史の公刊」を期待したが、ついに完成しなかったことを嘆き、その急逝を惜

しんでいる。なお、この住田の学風も史学を重視した非常に手堅いものであったとされる<sup>(14)</sup>。彼らが志向した学の方向性がうかがい知れよう。

上杉文秀（一八六七～一九三六）は後に大谷大学学長にもなる人物であるが、三河出身で同郷というのみならず、山田より年長ながら、その養弟となり、また東京の真宗大学では山田に師事したという。上杉は遺稿集第二巻の序において、山田の学問態度を「あくまで科学的に、群籍を渉獵し史料を取捨し、古来の伝説を吟味し未知の史実を開闢した。（中略）歪められた伝説や解釈をすて、動かすべからざる史実に拠って聖人を伝え、教団を観た。さうして常にあるべき真宗を熱心に主張した」と評価しつつ、やはり住田と同じく、その「大業績を纏めて世に問ふ機会を与えなかった」ことを惜しんでいる<sup>(15)</sup>。

遺稿集の編集は山田文郁（文昭の弟）の依頼をうけた住田・上杉兩人により主導されたらしい。西田直二郎（一八八六～一九六四）は「日本文化史学」に重きを成した研究者としてよく知られているが、山田文昭が京都帝国大学で講義を担当したことから、その関係で遺稿集第三巻の序文執筆者になったのであろう。

後進の関係者として特記すべきは日下無倫（一八八九～一九五一）である。日下は真宗大谷大学を卒業後、同大学図書係となり山田図書館長の下で働き、その指導を受ける。日下もまた、山田と同郷であり、親交も厚かったのだろう。<sup>(16)</sup> 山田により先鞭が付けられた真宗史学を、後に日下がさらに進めていくのである。

遺稿集の編集には桜部文鏡・本多了恵といった同郷の人びとも深く関わっている。山田は布教・法話や詩藻・俳諧等においても豊かな才を見せ、三河の地元を中心に山田を慕う人びとは多かったと言われる。ところで、山田文

昭は、明治三十二年（一八九九）に記された『三為会員名』<sup>(17)</sup>に「本会創立員」の「第壹子」として冒頭に名前が載っている。ちなみに「賛助員」のなかには清沢満之の名前もあるなど錚々たる顔ぶれがそろう。三為会は現在も大谷大学卒業生で三河出身者の同窓会として存続しているが、その草創期に山田が深く関わったのである。明治三十年（一八九七）に記された『三為会小史』によれば、大谷派革新運動に加わった真宗京都中学生が明治二十九年冬に放校され、真宗東京中学への転校を命じられたようである。その際に従来あった「三省会」を解消して新たな会を設立することが東京・京都・三河各地で議論され、明治三十年七月に村上専精の入覚寺において関係者が一堂に会し、清沢満之の提案による「三為会」という名称を名乗ることが確認された。以後の三為会の活動において、山田文昭は委員そして幹事として運営に大きく関わっている。三為会には三河の碩学がほぼすべて関わっているようで、そのような学問的環境がまた、山田に大きな影響を与え、山田を支えたと言えるであろう。

## むすびにかえて

最後に、山田文昭の親鸞観、真宗史観についてうかがっておきたい。山田の親鸞観については、『黒衣の聖者』冒頭の有名な文章がある。<sup>(18)</sup>

聖者（しょうじゃ）が黒衣（こくえ）を着たのではない、黒衣のまゝが聖者だったのだ、（中略）かういふ意

味で黒衣の聖者は私にとって親鸞聖人たゞ一人である。

大正六年（一九一七）、四十一歳の時の文章である。これに続いて語られていく内容は、「真実の親鸞聖人に接したい」という想いを基底として、歴史学者の眼と親鸞への崇敬、この二つの絶妙なバランスによってつむぎだされ、法話でありかつ、同時に「史学の見地」が色濃く出たものであった。歴史学界の立場からすれば、信仰の側面をはずせないところに限界を指摘するところであろうが、真宗寺院に生まれ、歴史を志した山田文昭のスタンスとしては、ごく自然なものであっただろう。

山田文昭はまた真宗史について、「真宗史といふは真実の教法の歴史即ち教理史でなくてはならぬ。けれども法は独り動くものではない（中略）法の動く所必ず人がある」とし、その「法と人」すなわち「教法と教団は事実の上に於て不即不離」であって、「今課せられて居る真宗史は教団の変遷推移」であり「史学の見地に立ちて、法に動かされゆく教団」を論ずるが、「教団を表とし教理を裏面として」考察するのが正しく「真宗史の意義」であるという。<sup>19</sup>すなわち「教団」が色濃く意識されているのであり、「教理史」との「不即不離」を説きつつも、当面する課題は「教団史」であると認識していた。ここに「教団史」としての「真宗史」の成立がうかがえよう。

以上のような親鸞観、真宗史観を基底として、山田文昭は数々の業績を生み出していく。まず、親鸞伝研究においては、『尊卑分脈』『日野一流系図』などの錯綜する内容を精緻に検討し、史料批判を行なったこと、あるいは比叡山時代の「堂僧」がいわゆる堂衆ではなく常行三昧堂のそれであるとしたことなどが挙げられよう。親鸞をめぐ

る当時の議論は、不確実な伝説の排除が行き過ぎて、親鸞の实在そのものが疑われたが、ときには稚拙な論考や発言も飛び交ったようである。そのなかで辻善之助（一八七七—一九五五）や長沼賢海（一八八三—一九八〇）、中沢見明（一八八六—一九四六）らによる重要な研究も生まれたが、それでもなお行論が荒かった。そういった問題点を着実に指摘しつつ、精緻な研究をもって山田文昭は、親鸞伝研究に新たな一石を投じたのである。また、『親鸞聖人門侶交名帳』や光明本尊などの先駆的研究、また『存覚一期記』『存覚袖日記』等の史料的价值なども見出すなど、その初期真宗史料研究についても高く評価されるべきであろう。さらに、立川流の研究なども特筆され、西田直二郎も賞賛したように、日本仏教史研究における成果にも注意すべきと思われる。実証成果的に見ても、山田の研究内容は十分なもので、それゆえ、今もなお、注目に値するのである。ともあれ、あくまで真宗史を基本としつつ、そこから日本仏教史の課題をも見渡していく。そのような道筋が山田文昭の学問スタイルに見出せる。

しかし、山田文昭には仏教史学者の嚆矢となる村上專精のように広範な研究の場で一世を風靡したというような動向はうかがえない。真宗史・日本仏教史をめぐるその研究成果をさらに大きく、日本社会の歴史を明らかにしていく研究動向に投じていくような機会はなかったようである。急逝によりついに本格的な執筆活動の時間がなかったことが、その大きな原因ではあるが、研究活動の場が宗門学事の範疇を大きく超えることがなかったこともまた事実であろう。そこが山田（のみならず古今の真宗史研究者）の限界とも指摘できようが、本人の活動志向はともかく、その業績が、明治後期から大正・昭和初期の学界動向のなかでどのような位置にあったものとして評価できるのかということについては、今後なお検討していく必要はあるだろう。



本稿では、前提から山田文昭を「真宗史研究の先駆者」として位置付けていたが、その親鸞観、真宗史観や遺した業績などから、そのことがあらためて確かめられたものと思われる。ただし、山田個人の事績は明らかにできたものの、真宗史学史の全体的な潮流については十分に言及できなかった。全体を押さえなければ、個人の位置付けも不十分なままであろう。山田文昭の同世代にはさらに、「恵信尼文書」の発見で有名な鷲尾教導（一八七五—一九二八）や、書誌学的研究などに優れた成果を残した禿氏祐祥（一八七七—一九六〇）らの名も挙げられる。多くの研究者の学問的交流のなかで、真宗史研究が醸成されていったものと見られ、その歴史を振り返り、検証していくこと、すなわち真宗史学史という課題については、今後とも考察を進めていくことにしたい。

#### 注

- (1) この表現は、同朋大学仏教文化研究所二〇〇六年度春季企画展示として行なった「真宗史研究の先駆者 山田文昭コレクションの世界」において用いたものである。なお、本稿はこの企画展示の際に発行した図録の解説「山田文昭—その生涯と学問・研究スタイル—」をもとに、さらに検討を加えて文章化したものである。
- (2) 「文昭」の読み方については「もんしょう」とする文献がある（作成者不明「山田文昭教授略年譜」に「もん」のふりがなが昭和四十年（一九六五年）時の後筆で付されている）。なお、本稿は研究論文であるため、「師」等の尊称を用いない。
- (3) 山田文昭遺稿集第一巻『真宗史稿』（破塵閣書房、一九三四年）序。
- (4) 柏原祐泉『真宗史・仏教史の研究Ⅲ近代篇』（平楽寺書店、二〇〇〇年）。
- (5) 草野顕之『戦国期本願寺教団史の研究』（法蔵館、二〇〇四年）。
- (6) 『東海印度学仏教学会 第一回大蔵会展観目録—夢白廬文庫本 法隆寺「切経」—』（同朋大学、一九九七年）。
- (7) 昭和八年（一九三三）に建立され、上杉文秀が碑文を記している。この顕彰碑の隣に山田文昭の墓がある。

(8) 村上專精は明治三十四年(一九〇二)に「仏教統一論」で大乗非仏説を提唱して大論議をまきおこし、まもなく大谷派の僧籍を離れている。そういった事情が影響している可能性はある。ただし、山田文昭が村上專精らと会っていることは、たとえば明治三十年(一八九七)に記された『三為会小史』において、演説者のなかに「村上先生」とあることなどからもちろん明らかである。ここで言いたいのは山田文昭がもっぱら直接的に師事したのは誰かという問題である。

(9) 本稿中において同朋大学(真宗専門学校)に関する部分は『同朋学園七五年史』(同朋学園、一九九六年)を参照した。

(10) 本稿中において大谷大学に関する部分は『大谷大学百年史』(大谷大学、二〇〇一年)を参照した。

(11) 昭和十二年(一九三七)に真宗専門学校に寄贈された「夢白廬文庫」は、山上正尊により目録が作成されたが、現在、同朋大学に残る目録には若干の錯乱もあり、正確な数字は出し難い。なお、大谷大学図書館には総数約二五〇点が寄贈されたという(横田恵「山田文昭教授とその蔵書―大谷大学図書館蔵書志(2)―」、大谷大学広報五五―五、一九八一年。上林直子氏のご教示)。同朋大学と大谷大学、そして住田智見の融誓寺(名古屋市)におさめられた分を合わせれば、山田文昭蔵書のおおよその全容が明らかになると言われるが、全体的な把握は課題である。

(12) 同朋学園大学部附属図書館蔵。前掲註(1) 図録参照。

(13) 同朋学園大学部附属図書館蔵。前掲註(1) 図録参照。

(14) 『真宗人名辞典』(法藏館、二〇〇〇年)、織田顕信「真宗寺院の形成」(『同朋仏教』第四一号、二〇〇五年)。

(15) 山田文昭遺稿集第二卷『真宗史の研究』(破塵閣書房、一九三四年)序。

(16) 日下が大正十年(一九二一)に「満鮮旅行」に行った際、その「記念」に現地で購入した朝鮮典籍を「山田文昭先生」に

「拝呈」している(同朋学園大学部附属図書館蔵。前掲註(1) 図録参照)。

(17) 『三為会員名』と『三為会小史』については小山正文氏のご教示を得た。

(18) 『黒衣の聖者』(布教叢書第十三編、一九二〇年。後に山田文昭遺稿集第四卷『逍遙遊語』(破塵閣書房、一九三四年)収録他にも単行再刊あり。【表2】参照)。

(19) 山田文昭遺稿集第一卷『真宗史稿』(破塵閣書房、一九三四年)冒頭。

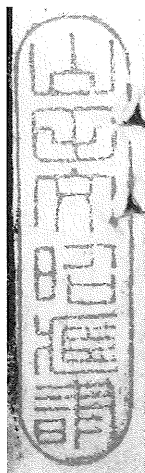
(20) 山田文昭遺稿集第三卷『日本仏教史の研究』(破塵閣書房、一九三四年)序。

【参考資料】蔵書印：同朋学園大学部附属図書館蔵の「夢白廬文庫」本には次の八種類の朱印があることを確認した。Eを除いてすべて山田文昭の印である。いずれも冒頭（表紙・表紙裏／三丁表程度）に押されているのが基本であるが、印が押された順番や、A B、C Dの関係性など検討すべき点がある。

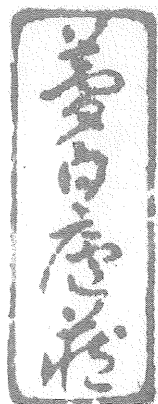
（朱印A「山田文昭蔵書」）



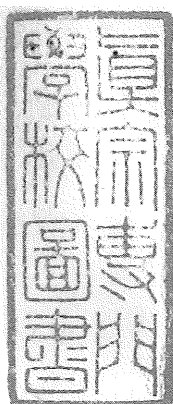
（朱印B「山田文昭蔵書」）



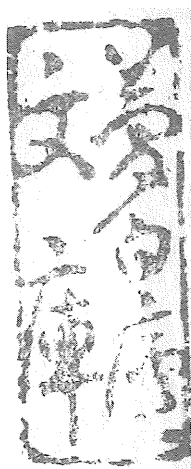
（朱印D「夢白廬蔵」）



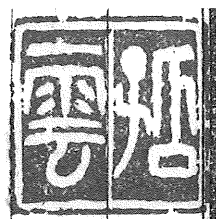
（朱印E「真宗専門学校図書」）



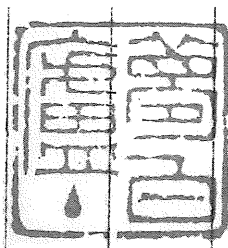
（朱印C「夢白廬文庫」）



（朱印「孤雲」）



（朱印「夢白廬」）



（朱印「夢白廬蔵」）

